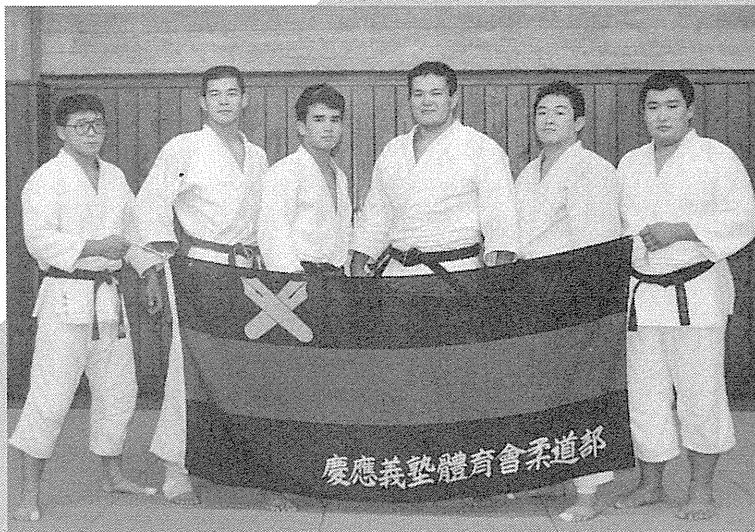


1989年度／平成元年度（平成元年4月～平成2年3月）



役員

部長：田村 茂
師範：清水 直臣、安藤 勝英、加藤 雅晴
総監督：成毛 秀臣
監督：植村健次郎
主将：狩野 学
主務：石川 琢也
副将：松井 聰司、政岡 和洋
学連委員：武田 昇
体育会常任委員：狩野 学、土屋 嘉広
副務：吉沢 大介、米沢 博行
新人監督：土屋 剛
日吉高コーチ：渡辺 一博
志木高コーチ：三島 一樹
普通部コーチ：林政 一郎
中等部コーチ：加賀美行彦
幼稚舎コーチ：武田 昇
合宿所主務：渡辺 祐二
合宿所副務：竹村 賢一

ET事件

石川 琢也

私達平成2年卒の面々は6名。人数も少ないのでざっと全員の紹介をさせていただくと…。「毎朝下級生にコーヒー豆を挽かせ、振る舞ってやり、本人はご満悦だが、どう見ても下級生は迷惑しているとしか思えない」主将の狩野。「やる気ない、と言いながらも稽古ではやたらと一生懸命な、和製エルビス・プレスリー」副将の松井。「下級生声！、とハッパを掛け、過剰なまでに心優しい」同じく副将の政岡。「美しい肉体をつくることに努力を惜しまないナルシストかつロマンティスト」の奥脇。「怠惰な態度が常に目に付くが、試合では何故かおいしいところをもっていく」辻。そして「自分の部屋は汚いくせに、やたらと下級生に細かく指示する」主務の小生、といったところだ。

私達が4年生になってからは、稽古重視で、これまでの先輩方の蛮カラな体質はやや薄れ、アフター稽古での武勇伝はあまり多くはない。宴会等では「どんなことがあっても絶対に救急車は呼ばない」という伝統も小生が破ってしまった（この場をお借りして懺悔させていただきます。酔った下級生に車をぶつけられるわ、病院で一晩中暴れる下級生の手をニギリ続けるわで、踏んだり蹴ったりでした。）。とはいえた以外でのエピソードの幾つかはある。紙面の都合もあるため印象に残る一つを以下に披露させていただきたい。

幹部交代式も終わり、2次会にヒヨウラのカラオケに繰り出した時のこと。先発隊が店を探し、

主将の狩野らを待っていた。店は細い階段を真っ直ぐに降りていく地下1階にある。自転車で来た狩野は、自転車に跨ったまま階下の店をのぞき込み、「おーい、席は取れたかー」と呑気に尋ねた。すると、自転車がカタカタと階段を下り始め、110Kgを支えていた自転車は次第にスピードアップ。店に突っ込むかというところで、正面に構えていた奥脇が真剣白刃取りの要領で、前輪をキャッチしようと試みた。前輪は、奥脇の手をすり抜け、眼鏡の枝にぶつかった。奥脇の眉間からは多少血は流れたが、狩野、奥脇とも大したケガにはならず、店を破壊することもなく済んだ。身体を鍛えていたからこそといえばそれまでだが、そばで見ていた小生としてはあれだけの衝撃で大したことにならなかったのは未だに不思議である。狩野は「E T事件」等といって気を良くしていた（映画好きの方であればむしろ「アンタッチャブル」の乳母車のシーンの方がイメージしやすいかと）が、2次会後にもう一暴れし、道路標識を地面までひん曲げるという暴挙に出た。必至で元に戻そうとする小生の努力も虚しく、翌日その道路標識は撤去されていた。

こうして原稿を書いてみると、月並みだが昨日のことのように感じられる。現在私達の勤務地はバラバラで、なかなか集まりにくいが、早慶戦等の行事には全員が顔を合わせ、旧交を温め、先輩や後輩、現役の皆さんと接することができれば、と思う次第である。

試合記録

■第38回 東京学生柔道優勝大会 平成元年5月28日 日本武道館

2回戦	本 勢	0	-	5	東洋大学
	土屋 剛 2年		引分け		吉川章博
	石川 琢也 4年		横四方固め	○	樋口賢治
	渡辺 一博 2年		合せ技	○	松山友保
	土屋 嘉広 3年		引分け		小林勝人
	渡辺 祐二 3年		合せ技	○	斎藤進寿
	竹村 賢一 2年		袈裟固め	○	良縁寺治
	政岡 和洋 4年		内股	○	佐藤兼司

■第8回 東京学生柔道体重別選手権大会 平成元年9月3日 日本武道館

-71kg級	1回戦	石川 琢也 4年	○	不戦勝	新明栄吾	東藻大
	2回戦	石川 琢也 4年	○	合せ技	黒川真人	成蹊大
	3回戦	石川 琢也 4年		内股	井口孝行	大正大
-78kg級	1回戦	政岡 和洋 4年	○	上四方固め	大野真	立教大
	2回戦	政岡 和洋 4年		背負投げ	吉川弘治	国学院大
	1回戦	土屋 剛 2年		判定	常田高広	創価大
	1回戦	宇田 博信 2年		判定	大橋良守	国学院大
-86kg級	2回戦	土屋 嘉広 3年	○	不戦勝	樺沢健太郎	杏林大
	3回戦	土屋 嘉広 3年		大外返し	大沼延匡	日体大
	1回戦	渡辺 一博 2年		支釣込み足	藤田義智	大東大
	1回戦	政岡 和洋 4年		横四方固め	米沢昭仁	亜細亜大
	2回戦	竹村 賢一 2年	○	合せ技	谷川智章	一橋大
	2回戦	竹村 賢一 3年		腕拉ぎ十字固め	浅野繁	国士館大 7位入賞 全日本出場権獲得
	2回戦	三島 一樹 2年		横四方固め	小原道由	国士館大
95kg超級	1回戦	狩野 學 4年	○	合せ技	伊藤史彦	高千穂大
	2回戦	狩野 學 4年		返し技	玉置新	日本大
	1回戦	辻 基之 4年		合せ技	砂川和文	日本大

■第41回 早慶対抗柔道戦 平成元年10月10日 日吉記念館

本 勢	-	○	早稲田大学	2人残し
				優秀選手：狩野学、松井聰司、渡辺一博
渡辺 一博 2年	○		浅 野	
渡辺 一博 2年	○	崩れ上四方固め	御 庄	
渡辺 一博 2年	○	背負投げ	岡 沢	
渡辺 一博 2年		一本背負い	山 村	
関口 健一 2年		引分け	山 村	
奥脇 直純 4年		引分け	梅 田	
高柳 雅矢 1年	⊖	小内刈り	白 川	
高柳 雅矢 1年		合せ技	竹 本	
松井 聰司 4年	○	崩れ上四方固め	竹 本	
松井 聰司 4年	○	払腰	今 井	
松井 聰司 4年		反則負	鈴 木	
吉沢 大介 3年		内股	鈴 木	
渡辺 祐二 3年	○	合せ技	鈴 木	
渡辺 祐二 3年		引分け	定 松	
岩崎 清信 4年		引分け	月 岡	
土屋 剛 2年	○	脇固め	渡 辺	
土屋 �剛 2年		小外刈り	道 脇	
石川 琢也 4年		大外刈り	道 脇	
竹村 賢一 2年		小外刈り	道 脇	

林 政一郎	2年	○	腕拉ぎ十字固め		道 脇
林 政一郎	2年		内股	○	森 川
政岡 和洋	4年		大外刈り	○	森 川
三島 一樹	2年		内股	○	森 川
真野 照久	4年		合せ技	○	森 川
宇田 博信	2年		内股	○	森 川
鈴木 学	3年		内股	○	森 川
辻 基之	4年	○	合せ技		森 川
辻 基之	4年		引分け		田 中
土屋 嘉広	3年		引分け		石 塚
狩野 学	4年	○	横四方固め		川 地
狩野 学	4年	○	体落し		佐 野
狩野 学	4年		腹固め	○	吉 村
			不戦勝	○	堀 内

■第31回 東京学生柔道二部優勝大会 平成元年10月29日 国士館大柔道場

1回戦	シード					
2回戦	本塾	3	-	1	明治学院大学	
渡辺 一博	2年	○	片羽絞		小田山	
松井 聰司	4年		引分け		加藤(英)	
土屋 剛	2年		引分け		田上	
狩野 学	4年	○	合せ技		北田	
土屋 嘉広	3年	○	横四方固め		小会沢	
渡辺 祐二	3年		裏投	⊖	加藤(年)	
竹村 賢一	2年		引分け		富永	
準決勝	本塾	1	-	4	東京学芸大	優秀選手：狩野学
松井 聰司	4年		横四方固め	○	平野	
渡辺 一博	2年		引分け		安倍	
狩野 学	4年	○	支釣込み足		鍋島	
土屋 嘉広	3年		内股	○	西岡	
土屋 �剛	2年		大内返し	⊖	吉田	
政岡 和洋	4年		引分け		古橋	
渡辺 祐二	3年		上四方固め	○	水田	

清水先生の憶い出

昭和22年卒 水谷 英男

清水先生が初めて塾柔道部の師範として迎えられたのは昭和13年、丁度私が普通部に入学し新入部員として柔道部に籍を置いたのと同時期に当ります。以来今日迄50年同じ期間を共に柔道部にお世話になり、節目々々での憶い出が目をつむると走馬燈のように浮かんできて、それがそのまま自分の青春譜となり感慨に耐えません。

普通部時代にみた先生はまだ30才前の血気盛りで、当時の大学柔道部には羽鳥、赤塚、俣野、田岡、飛田の各5段他高段の部員がキラ星の如く揃っておりましたが、その強豪達を相手に激しい真剣味溢れる稽古を何度も目のあたりにし若き血を燃やしたものでした。

部員同志の稽古も夫々が高段者であり、熱心な人達ばかりで、今と違い迫力のあるものでしたが、先生の場合はそれを上廻る肉弾相打つの形容が適しい絵になるような歯切れのよい稽古振りでした。あの姿勢のよいスピードのある体捌き、特に後方に下りながらの足技（足払い大内刈小内刈）それから変化する体落しや一本背負が印象的でした。

予科時代に入り当方も2、3段となり、漸く先生に直接稽古して頂く年令になりました。先生32・3才頃でしょうか、当方も伸び盛りで柔道が面白くて堪らない頃で喰らいつくように掛かっていましたが、右の出足払いで何度も舞い飛ばされ随分口惜しい思いをしたものです。欠点を見つけるとそこを徹底的に突いてくるという指導でした。

そして戦火も激しくなり先生も応招、私も海軍予備学生となり暫く交流は中断されます。終戦後直ぐに8月23日には復員し翌日には懐かしい三田綱町道場を訪れました。そこには成毛、富沢、阿部君等が留守部隊の中心で2・30人の部員が激しい空襲の被害、敗戦という混乱の中で健気にも道場を守る姿に感動しました。私も早速復学、復部をし稽古に戻りました。

然し追討をかけるようにマッカーサー指令による学校柔道の禁止令（昭和20年より26年迄）が発令され部活動は中断し柔道部は解散させられました。部員は来るべき復活を希望に、相撲部、レスリング部、野球部、ラグビー部、アメリカンフットボール部に迎えられていきました。（夫々の部の戦後の復興・活躍に柔道部出身者の貢献は目覚ましいものがありました）同時に有志による稽古の継続は三田警察、皇宮警察、講道館等を転々として行われましたが、柔友会の先輩達の応援により飯塚師範の金剛館道場を譲り受け頂き、漸く本拠を得ることになりました。後の黄金時代をつくった渡辺、阿部、橋本、松山君等が普通部1年生で入部して来たのもこの頃だったと記憶しております。金剛館時代は師範こそ不在でしたが、殆ど昔のような楽しい先輩、後輩、団結し1つになった思い出深い時期がありました。

3・4年経つうちに柔道に対するマ司令部の偏見も薄れ学生柔道復活の気運も出てまいりました。羽鳥、石渡先輩等が中心となりここで清水先生に再び師範として帰って来て頂こうという交渉が始まりました。然し当時の東京は衣食住の事情悪く、郷里に安定した生活を送られている先生を迎えるには、先生の減私的な塾柔道部に対する精神なしにはとても無理な環境でした。にも拘らず先生は帰って来てくれました。以後40数年の先生の我々柔道部の先輩現役との公私に亘る隔てのない明るい交流はこれから各年次の皆さんが記述されていく通りであります。語り尽きませんが戦前より戦後上京迄の懐い出の一端を披露しご冥福を祈る次第です。

柔友会報58・59合併号より

清水先生御逝去の新聞報道

そばの会

会の名称：そばの会は通称で正式名称ではありません。

会の趣旨：江戸好みの旨いそばを肴に雑談に花を咲かせる至って気楽な会合です。

場 所：東京都中央区日本橋室町4丁目砂場
堅苦しいことが嫌いな連中の集まりなので会則や開催日の決まりは会費を除いてありません。但し開催日の目安として、年3回行われる大相撲東京場所の頃とお考え下さい。連絡方法は主に電話です。

会の生立ち：大正14年卒の阿部秀助さんが昭和30年末ごろ、小泉準三さん、羽鳥輝久さん、菅原春雄さん、ご子息の慎蔵さんに呼び掛け会を造られたのが最初でした。

会員のほかの古参のかたは、奥田直道さん田岡協さん、井上豊明さんが居られます。減ることはあっても増えることのない会員数です。新しい方々の参加を歓迎いたします。

石渡英二 磯辺晃平 小坂 肇